

変える農業

2



菊栽培企業アルカディアのファンライ
フェン社長兼オーナー（左）とウエス
トランド州政府のファンデフェン戦略
顧問兼国際関係担当

国際 | T財団 プログラムディレクター

日下部 裕美子

世界に誇る農業生産効率
オランダ農業の秘訣

オランダは、国土面積は日本の約9分の1、九州とほぼ同じで、かつ寒冷地でありながら、アメリカに次ぐ世界第2位の農産物輸出

「スマート農業」の進化で生産性を向上

「グリーンポート」は全国に5カ所形成されており、今回訪問したウエストランド・クラスターは、国内最大の生産量を誇る。ウエストランド州政府は、当地における施設園芸の振興とともに、海外展開にも積極的に取り組んでおり、2014年3月に安倍首相が訪問したことも知られる。

ウエストランドでは、菊栽培企業のアルカディア（写真）など

「グリーンポート」は全国に5カ所形成されており、今回訪問したウエストランド・クラスターは、国内最大の生産量を誇る。ウエストランド州政府は、当地における施設園芸の振興とともに、海外展開にも積極的に取り組んでおり、2014年3月に安倍首相が訪問したことも知られる。

オランダ農業が競争力を高めた背景には、施設園芸を始めとするスマート農業化により、恵まれない環境条件やコスト面の課題を克服したことに加え、これを支える三つの要素がある。

第一に「選択と集中」で、収益性の高い品目に生産を限定してい

挙げられる。民間のコンサルティンク企業が経営アドバイスからIT導入ノウハウまで、専門性の高い経営支援サービスを収益事業として提供する。生産者である農家や農業法人はこういったサービスを有償で受け、経営力を高めている。

日本の農業は多品目、高付加価値・高品質重視であるため、効率重視のオランダ農業とは特徴が異なる。オランダはスマート農業を技術的に導入するだけでなく、産学官での戦略推進と生産者の経営力向上に活用することで、スマート農業の普及を着実なものとしている。日本も大いに取り組むべきである。

国である。ロボット技術やITを活用して生産性向上を実現する「スマート農業」の中でも、室内で生育環境を管理することができ「施設園芸」が盛んで、主要な輸出品目である花卉（チューリップやバラなど）、野菜（トマトやパプリカなど）の栽培を支えている。

生産者や研究機関、関連企業等が集まった施設園芸クラスター

が施設園芸に取り組む。室内にセンサーを設置し、温度や湿度、光量、CO₂量、風速などを検知し、これらのデータを解析して、植物の光合成の効率化を管理する。商品は個別にIoT管理され、全世界に出荷されていく。自家発電により、生産エネルギー効率も管理するハウスも多い。施設園芸の効

果は大きく、例えばオランダのトマト栽培の単位面積当たりの収穫

る。立地的にも、輸出拠点となる港湾の近隣に、生産者や研究機関がクラスターとして集積しており、効率的である。

第二に、政府による積極的な研究開発・イノベーション戦略がある。国の農業予算の22%が研究開発に投入され、世界に先駆けるスマート農業の進化に拍車をかけている。

第三に、生産者の経営力向上が

今回は、オランダのワーヘニンゲン大学を中心に形成された世界最大の食品産業クラスター「フードバレー」における異業種間連携、産学官連携による技術開発について紹介する。